

大阪における文化の分野別動向 2005年
「地域文化」

弘本由香里

内発型まちづくりの文脈から

地域固有の文化が失われていくなかで、再び地域文化に目を向ける動きが活発化している。地域文化とは、地域の暮らしの安心や心の豊かさを支える貴重なソーシャルキャピタル（社会関係資本）であり、地域文化の喪失は、子どもから高齢者まで地域に生きるあらゆる人々の暮らしに大きなリスクを与えることが、明らかに認識されるようになってきたといってもいいのではないだろうか。

こうした背景から、地域文化をめぐる構図で近年顕著なのは、地域資源を活かした内発的なまちづくりへの志向であり、目指すべき都市像として「創造都市」というキーワードが用いられることも多い。そこでは、地域に蓄積された歴史文化・生活文化と、新たな価値を創造する芸術文化とが、両輪として必要とされる。確かに、アート系のNPOが地域にコミットする活動を展開する例が数多く見られるようになり、地域まちづくりの現場では歴史文化・生活文化の再発見が、身近なテーマとしてさまざまな活動団体によって取り組まれ普及してきている。

上記のような動向の典型例といえるような、いくつかのトピックを以下に紹介しよう。

アート系NPOが向き合う地域文化

この数年で、アート系のNPOの数は着実に増えており、個々の専門領域やミッションを超えて、より高次のミッションを共有する横断的なネットワークの形成も見られるようになってきている。そうした動きを象徴していたのが、2005年11月から12月にかけて開催された「第3回大阪・アート・カレイドスコープ」だろう。主催は大阪府立現代美術センターだが、企画・運営は大阪を拠点に活動しているアート系NPO8団体（大阪アートNPOコンソーシアム）が担った。プログラムの中には、地域の生活文化の映像記録を収集・上映するプロジェクトや、地域の歴史の痕跡を巡るアートツーリズム、まちを歩くことによって作品を生み出す作家のプロジェクト、地域社会とアートをテーマにしたダイアログ（対話）などがあり、地域文化に向き合う数々の取り組みが特徴のひとつとなっていた。

ミュージアム・ボランティアが掛け橋に

地域の歴史文化・生活文化を掘り起こす活動は無数あるが、公的な文化施設と地域を市

民ボランティアがつかないでいった好例に、「大阪市立住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）」のミュージアム・ボランティア「町家衆」が2005年3月から4月にかけて開催した「ディスカバリー天満...町家衆がこんな天満見つけまし展」がある。町家衆自らが企画・申請して外部の助成金を獲得。同館の地元・天満のまちを町家衆が訪ね歩き、地域の方々の共感・協力を得て、数々の思い出の詰まった貴重なまちのお宝を預かって実現した本格的な企画展だった。商いの道具や、生活道具、婚礼道具、かつて盛んだった地場産業のガラス器、天神祭のお迎え人形や船山車などの展示に加え、小学校の授業や給食の再現をはじめとしたユニークなイベントの数々。さらに地元誌『天満人』とのタイアップも加わり、次世代への歴史文化・生活文化の継承に貢献するものだった。

施設の集積を地域アイデンティティに

地域の文化資源を前向きにネットワークして、都市の創造性・文化的求心力として育んでいこうという方向性も、模索されるようになってきている。例えば、関西経済連合会が構想し関係者に呼びかけて立ち上げられたネットワーク「大阪シアターパーク」がある。大阪城公園周辺に立地する13もの劇場・ホールをネットワークして、集積の魅力を発揮していこうというものである。発足した2005年は、バックステージツアーの開催や、大阪城エリアエンターテインメントマップの発行といったPR活動が主だったが、大きな波及効果として、同年の7月から8月を中心に開催された「大阪・アジアアートフェスティバル」（同フェスティバル実行委員会主催）が、大阪シアターパークに呼応して大阪城周辺エリアを会場に開催されたことが挙げられる。コア事業としてのクラシック音楽祭、短編演劇祭、短編映画祭等の連続開催とともに、時期を合わせて（財）大阪21世紀協会主催の「舞台芸術・芸能見本市2005大阪（pamo）」も開催された。ちょうど天神祭の時期であったこともあり、歴史的な都市祭礼の華と、現代の芸術の祭典が川を挟んで展開する大阪ならではの祝祭空間の妙もあった。

居住地魅力の発信と地域文化

一方、地域文化に根ざした居住地魅力の発信を目的とする行政側からの働きかけも見られた。大阪市が住宅施策の一つに挙げている「上町台地マイルドHOPEゾーン事業」だ。上町台地のうち、大阪環状線の内側を都市居住促進のリーディングゾーンとして位置付けて、魅力ある住環境の形成に取り組むNPO等と連携・協働して、住むまちとしての大阪の文化を地域から発信していこうというものである。2005年12月にキックオフイベントとして「住むまち・上町台地フォーラム」が開催され、同地域で歴史文化・生活文化を活かし育む活動を展開している23ものまちづくり活動団体が一堂に会し、お互いの取り組みやこれからのまちづくりについて語り合った。

四天王寺の聖徳太子演奏会、一心寺の一心寺シアター倶楽、大蓮寺・應典院の應典院寺町倶楽部などの活動、玉造稻荷神社の玉造黒門越瓜の普及、生國魂神社の大阪新能や彦八

まつり、神津宮のくろもん寄席、堀越神社のぶっちぎり祭、寺町で繰り広げられるなにわ人形芝居フェスティバルなど、寺社の集積が生み出す豊かな文化活動の蓄積もあれば、市民立の直木三十五記念館、NPO が発行する地域情報誌「うえまち」、西代官山クラブによるうえまち貸し自転車など新たな市民事業も次々と誕生している様が伝えられた。

また、近年からほり倶楽部（空堀商店街長屋再生プロジェクト）などによる長屋再生が注目を集めてきたからほりエリアでは、地元関係者が空堀まちなみ井戸端会を結成し、大阪市によるまちなみ修景事業（空堀地区 HOPE ゾーン事業）もスタートしている。

課題はコミュニケーションデザイン

アートNPOから、地域の文化施設、経済団体や行政、そしてまちづくり活動団体まで、さまざまな主体とネットワークが地域をベースに有機的にうごめき、試行錯誤を繰り返しながらも、少しずつ成長し始めている。ある意味で、地域文化の再生に向けた、混沌状況にあるのだともいえるだろう。こうした状況で求められるのは、異なる立場に立つものどうしがいかに互いの価値観の違いを認めながらも、それらを乗り越えていくか。重要なのは、そのためのコミュニケーションデザインといえるだろう。

奇しくも2005年、大阪大学で「大阪大学コミュニケーション・デザインセンター」が開設された。「専門知識をもつ者ともたない者、利害や立場の異なるひとびと、そのあいだをつなぐコミュニケーション回路を構想・設計する」という理念のもとに、科学技術や減災や臨床のプロジェクトと並んで、アート&コミュニケーションデザインのプロジェクトも設定されている。地域・暮らしに関わるさまざまなフィールドで、芸術・文化を活かす取り組みや、媒介者の育成を目指すという。地域文化のフィールドでのコミュニケーションデザインの実践に期待したい。（大阪ガスエネルギー・文化研究所客員研究員）